

滑稽俳句と俳号の謎(1)

八洲忙閑

俳句を詠む人を「俳人」という。広辞苑には<趣味として、また職業として俳句をつくる人。俳諧師。俳家。「蕉門の一」>とある。その俳人が詠んだ俳句を発表する際、自身の名を付すわけだが、本名か俳号とする。今回、当論壇の執筆にあたって、この俳号について考察してみたいと思い立った。

『月刊俳句界』が俳号について、二〇一三年七月号で第一弾、二〇一四年十二月号で第二弾の特集を組んでおり、そこに登場した俳人は計四十二人。その前文に<俳号には不可解なものが多い。しかし、そこには様々な物語があった。(第一弾)>。<俳号には名付け親の願いや作者の志がひそんでいる。俳号の由来を知るということは、その俳人の趣向を知り、目指した世界を垣間見ることである。(第二弾)>とある。故人の俳号には現在活躍中の俳人が文を寄せている。

ここでは、その俳号の全てを紹介する紙幅がないし、転載することも憚られるので、ほんの一例だけを抜粋してみたい。西東三鬼について阿部鬼九男氏が概ね次のように書いている。

<西東三鬼、本名斎藤敬直。「西東」は「斎藤」からのなぞりだが、「三鬼」の号は、何でも神田かどこか下町で雑俳みたいなものをおやじさんらとひねっている時、ふと思いついたらしい。推測では「サンキュウ」のもじりだ…。>

この「もじり」こそ、滑稽そのもので、一種のパロディーである。このように著名人たちの俳号には「もじり」をもって名付けたものが多いので

はなかろうか。高濱虚子の「きよし」は本名の「清（きよし）」のもじりであることは、よく知られている。西東三鬼に戻せば、俳号自体に滑稽味があり、彼の句にもまた滑稽の本質が詠み込まれているのは間違いないところだろう。

水枕ガバリと寒い海がある 三鬼

水枕と寒い海との取り合わせだが、「ガバリ」という擬音語が滑稽味の決定打といえよう。水枕の水がガバリと揺れるのを耳元で聞き、寒夜の海もまたガバリと波音を立てたのだ。

おそるべき君等の乳房夏来る 三鬼

乳房は夏の「風物詩」。拙句に「羅や乳房の重み透けて見ゆ」があり、三鬼は彼女らの巨乳をして「おそるべき」「夏と共にやって来た」と詠嘆した。そこに滑稽の神髓が折りこまれており、拙句の方は「重み」＝「巨乳」と受け止め、婉曲に詠んだもの。

去年今年貫く棒の如きもの 虚子

あまりにも有名な虚子の去年今年の句。貫く棒の如きとたとえたのだが、去年と今年が並列しているのではなく、一本の棒が縦に貫いているようだ、と意志の固さを力を込めて詠み込んだもので、そこにこの句の滑稽味が真剣に読み取れる。

初空や大悪人虚子の頭上に 虚子

多数の門人がいてなお、敢えて己れのことを「大悪人」と卑下する、そのこと自体が滑稽そのもの。大虚子にして大悪人なら、凡俗の我らは極悪人なるべし。何と皮肉を込めた滑稽句であろうか。